



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



イラスト/安田千夏

初夢みましたか?一年を占うのに縁起の良い夢といえば「富士、二鷹、三茄子」は有名ですが、その縁起の良い鳥であるタカはワシとやらんで生態系の頂点のひとつに立つ自然界のハンターですよ。どちらも生物学的にはタカ目タカ科でワシタカとまとめて呼ばれることもあり、アイヌ文化ではいくつかの種に名前がついています。パセカムイ(尊い神)とされるワシタカの中でも羽を広げると二メートルを超えるオオワシはアイヌ語でカパッチリやカパッチリカムイ、オジロワシはオンネウヤシチカフと呼ぶ他、物語に登場するワシをカパッチリとも呼ぶんだって。この時期は、白老でも大空を飛翔するカパッチリの姿を見ることができますよ。

川上まつ子さんが語った物語に人間の娘に恋するワシ神の話が。「それはそれは微笑みを浮かべた比類ない美しい若者」とワシ神がイケメンで登場するの。あのシャープな目や鋭い嘴からもイケメンなのは想像できるけど、そんなワシ神が「顔かたちの優れた娘は大勢いるが、心も清らかなものはいなかった。しかし、お前の心はカムイよりも清らかだ。これからは私と暮らしてくれないか」とプロポーズするのね。イケメンな上に人を見る目まで具わっている非の打ち所のないカムイっていいよね。



アイヌ文化ではワシは大切なカムイだったけど、その理由の一つは、重要な交易品としてアイヌの人々に豊かさをもたらしてくれたからだと思ふんだよね。江戸時代、ワシの羽は矢羽としては第一級だったし、武士のステイタスともいえる鷹狩りに使う幼鳥も、アイヌの人たちが捕獲して交易に出してたの。ワシの捕まえ方はいろいろあったみたいだけど、一番衝撃的なのは断崖絶壁の巣からヒナを捕る方法。なんと、吊り下げられた巨大な編み袋の中に入れて降りていくの。下は波濤逆巻く海で、まさに命がけ。松浦武四郎が「蝦夷山海名産図会」に描いています。

ところで、アイヌの人たちが飼ってた鳥っていえば、シマフクロウって思いがち。でも江戸時代の和人の記録では、ワシの方がずっと多く、特に十勝より西の地方ではそうだったみたい。それと、釧路あたりではクマとワシは仲が悪いって言われたりするみたいだけど、実際には両方セットで飼われている記録も多いの。だから、あまり知られていないけど、立派に育てた後は、ワシに対して「おちゃんカムイ(神)の国に魂を送る儀式が行われてました。18世紀末のヒラカ(平賀・現日高町)の記録では、クマ、シマフクロウ、ワシ、いわばカムイ界のビッグスリーが送られてびつくり、でもダントツイケメンのカムイはやっぱりワシ神!

